

# ‘κόσμος, ἀλλοίωσις. ὁ Βίος, ὑπόληψις.’

43号 1991.11.9

文・編集・発行

恋 怪子

## LIVE: ドラスティックガンスミス 1991.10.26 新宿

この日のアンティックは「T.L.I.S. (THRASH LIVES IN SAVAGERY)」で、スラッシュバンドのライブ。私が中に入ったときは2番目のヘルチャイルドがはじまったところだった。音楽をやっている意味が感じられない。やる方と聞く方の違いになんにもおこらない。たぶんそのことにいらだつてのことだろうけど、ヘルチャイルドのヴォーカルの人には、ステージをおりるとき、ふくされたように、はきするように「どうぞありがとうございました!」

次のバンドがレギット。女性ヴォーカル。音の幅は厚いし、テクニックもありそくに見えるんだけど、やっぱりやろうときく方の違いにはなーんにも存在しない。「どうぞ、うまいだろう、はやいだろう、オレのギター」って感じのギターで、勝手にやれいばって思ってしまう。

最後がドラスティック・ガンスミス。だいぶ前にCD「SHAKE YOUR LIFE BLOOD」を聞いてライブを見たいと思っていたけど、ライブやっていなくて(この日が半年ぶりのライブだとヴォーカルの人がいっていた)、この日やっとくことができたのだけれど、この日と11月1日のライブで解散すること。「今日は持ち曲1曲全部やります」といって1時間くらいやった。前の2バンドはどの曲もおんなんじにきえたのに、ドラスティック・ガンスミスは1曲1曲に表情があり、それが実にゆたか。ヴォーカルの人(THE FOOLSのヴォーカルの人)に感じがとても似ている)。ギターの人も、ベースの人、ドラムの人も「どうだ!」っていう感じが全くなくて、むしろエリゲーブル。なのに音楽はずばり迫力。新曲といってやった曲は圧倒的で、棒立ちのようになってきいた。すごかった。ほとんど体を動かさないでいたのに汗をかいだ。

DRASTIC GUNSMITH, YOU REALLY ARE A BLOODSHAKER!!!



表紙(ドラスティック・ガンスミスのベースのKATSURA)



2ページのコメント部分

3,4ページ

5ページ

H.O.T.: 突然の解散ですが、何故ここに来てメンバーチェンジではなくて解散なのですか?

KATSURA: 簡単に言えば、音楽性の不一致です。彼らは南ジョー(G.)がほとんど曲を作っていました。南ジョーの持ってきたリフをアレンジするのが、基本的なパターンでした。そして4人が納得するまで、とことんねり直す繰り返しで、絶対に駄作は残さないで、完結といつてもいいくらいの曲もボソにしてやってきました。まあ、ここまでならどんなバンドでも経験している壁だと思います。しかし4人ともいい曲だと納得しても、皆がそれを表現する事が出来なくなってしまったんです。個々のリフが本当にぎりぎり分かれてしまったのが原因です。思えば、結成当時から異色な4人の組合せだったし、それがまたイイ影響となって曲も出来ていましたが、アルバムが出来た頃から次えなかなか進みませんでした。煮詰まるごとに詰め合いをくり返して、いろんな試みをしたけれど、妥協は出来ないしお互い気を使うのにも限界だなという感じ。

メンバーチェンジでは無くというのは、明らかに4人のやろうとするモノは違っていて、これからやるなら、それはもうDRAGUN'Sではなくて4つのバンドだからです。それがバンドの最高の理想ではあるけれど、もうこれ以上ダラダラとは出来ないというのが、解散の決定です。

11月1日THアベニューのライブは10月26日とくらべれば「すこし散漫な感じ」でした。それでもやっぱりしばらくしかった。あれだけのことができるのに音楽性の不一致で解散するって。厳しいね、音楽に対する姿勢が。

## LIVE: E1区 1991.10.23 原宿レイド

はじめて2曲目くらいまでは、けっこうヴォーカルをきていたけれど、その後はどうしてもYOUのギターに心がひっぱられていくてしまう。どうしても。こういうときはいつも「とともにYOUのギターがきたくてE1区のライブに来るようになったんだから」と自分の心をなぐさめちゃう。E1区のデビューシングル「BYE BYE MISTIC LADY」をきいた。ライブとちぎっているのは当然なんだけど、あのつやのある声じゃなくて、なんかありだにはさまったような感じがする。すこし「つくり過ぎ」な感じ。

## LIVE: THE WAIATS 1991.10.30 三軒茶屋ヘブンズ・ドア

「HERE WE GO」ではじまった。みんな椅子に座るか、床に座るかしていて、立っている人がほとんどない。あまりはじめのないライブハウスだし、THE WAIATSがいちばん最初にやったし、じがピリピリしていた。だけどすぐに「あー、この瞬間、この空間がいとおしいって感じにつつまれた。2曲目が「グレイ・カラー」。THE WAIATSの4人がステージについて、ロックンロールがあって、私はまるっきり1人で、THE WAIATSのたたき出していくロックンロールに自分を託して、この瞬間にしか存在しない宇宙にいる。ほとんど身じろぎもせずじでだけが舞っている。3曲目「TELL YOU」。1989年5月29日代々木競技場のTHE BLUE HEARTSのライブでヒロトが「オレがステージについて、みんなが生きにきていて、その瞬間にしかプレーヤーは存在せんのだ」といって思はれていた。それとおなじで、THE WAIATSの4人がステージについて、私が客席について、そのあたりに存在するものは、4人がステージを降りて、私も現実生活にもどらなくなってしまう。存在の余韻がしばらくあとまでこだましていることはあるけど…。だから、たしかに存在しているときは、それを一眼瞬も手離さない。4曲目「TRAIN DANCER」あたりから他のバンドめあての人たちが入ってきて、それまでシーンとしていたのにまわりがガサガサして「あー、ジャマだな」と、じがピリピリしてきた。だけど次の曲が「SHOTGUN BOY」で、はじめのところのギターをきいているうちにまわりの存在が全部止まって。私はまた、たった一人で暗くて青くて、冷たい宇宙に舞っていた。THE WAIATSは風。その風は私を暗くて青くて、冷たい宇宙で自由に舞わせてくれる。ほかはない。美しいな。「MOTORCYCLE BOY」、「DIAMOND ALLEY」とつづいて、「DIAMOND ALLEY」では涙がうかんできた。だけど、それは共感じゃなかった。

ヴォーカルの人やギターの人のじに触れたって感じじゃない。THE WAIATSの音楽が強烈に私の中のないかをよびます。他の人たちじゃぜったいによびますことができない、THE WAIATSにしかよびますことのできないもの。そして、これは偶然の出来事なのだ。このときのライブでおこった偶然、だからあんなにはかなく、いとおしく感じたのだ。「SUBWAY SLAUGHTER」であった。

外に出たら冷たい風が吹いていたけれど、私の心はそれとは全く別の冷たい感動で「ぱぱぱぱ」になっていて、言葉も凍りついたようになっていた。

## LIVE: THE COOL BEAUTY 1991.11.1 横浜ワーナーベニー

あの歌はどこから聴こえてくるのだろう? THE COOL BEAUTYは世の中のどこを具現しているのだろう? きいてるだけでわざわざてきた疑問。疑問がわざわざてくるにわかせて、ライブの隙中は解答を答えることはしなかった。ちゃんと時間をかけておちついで答えたければ解らないことだから。

次のライブリポートアンティック

THE WAIATSでひきおこされるものと、THE COOL BEAUTYでひきおこされるものはまるでちがう。THE WAIATSのライブは、絵を描くときの素描のようなもの。スケッチをもとに、そのライブのことを考えたり、テープをきて感じたことを描いて一枚の絵にしていく…。絵を描いていく樂しさが深くて、絵に没入する我が無限にあると感じられるのが「私にとってすばらしいライブ」といえるだろう。それにくらべると、THE COOL BEAUTYのロックンロールは文章を書くことにTとえられる。ライブでわざわざしてきた疑問を、テープをきてたりして答えるづけ、解答を出そうとする。そして、いいライブというものはその疑問が深いから、答を得るには思想が必要。

ロックンロールをこうやってきこえさせるものは「いたい」なんなのだろう? どちらも音楽のもつ力なのだろう? そして、ステーヴ・ヴァイガーランドがなことは自分の中にインスピレーションを宿していることだと思うんだ」といっていろいろなインスピレーションを私自身なりにがしか宿しているからなのだろうか?